



次の文章を読み、あとの設問に答えよ。

(50点)

1 この男、「⁽¹⁾あからさまに」とて、*今の人のもとに、昼間に入り来るを見て、女、「にはかに殿おはすや」と言へば、うちとけて居

たりけるほどに、心騒ぎて、「いづら、いづこにぞ」と言ひて、櫛くしの箱を取り寄せて、*白き物をつくと思ひたれば、取りたがへて、

*掃墨はきずみ入りたる、*畳紙たたみを取り出でて、鏡も見ず、うちさうぞきて、女は、⁽²⁾『「そこにて、しばし、な入り給ひそ」と言へ」とて、

是非も知らず。男、「いととくも疎うとみ給ふかな」とて、簾すだれをかきあげて入りぬれば、畳紙を隠して、*おろおろにならして、口おほひて、⁽³⁾したてたりと思ひて、まだらに指形おまひにつけて、目のきろきろとして、またたき居たり。

5 男、見るに、あさましう、めづらかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄らで、「よし、今しばしありて参らむ」とて、しばし見るも、⁽⁴⁾むくつけければ、往ぬ。

女メの父母、かく来たりと聞きて来たるに、「はや、出で給ひぬ」と言へば、いとあさましく、⁽⁵⁾名残なき御心かな」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。怯おびえて、父母も倒たふれ臥ふしぬ。「その御顔は、いかになり給ふぞ」ともえ言ひやらす。「あやしく、などかくは言ふぞ」とて、鏡を見るままに、かかれば、我も怯おびえて、鏡を投げ捨てて、「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや」と泣けば、家の内の人も、ゆすりみちて、*これをば思ひ疎うとみ給ひぬべきことをのみ、*かしこにはし侍るなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる」とて、⁽⁶⁾陰陽師おんみょうじ呼よび騒さわぐほどに、涙の落ちかかりたるところの、*例の肌になりたるを見て、乳母めのと、紙おしもみて拭ぬへば、例の肌になりたり。

かかりけるものを、「いたづらになり給へる」とて、騒さわぎけるこそ、かへすがへす⁽⁷⁾をかしけれ。

(『堤中納言物語』「はいずみ」)

⑤ *今の人——男の新しい妻。 *白き物をつくる——顔におしろいを塗る。 *掃墨——眉まゆなどを描くのに使う墨。

*畳紙——掃墨などを入れるように折り畳んだ紙。 *おろおろにならして——適当に塗り伸ばして。

*これ——男の新しい妻。 *かしこ——男の前の妻。 *例の——通常の。

問一 傍線部(1)・(3)・(4)を必要な語句を補って現代語訳せよ。

(9点)

問二 「『そこにて、しばし、な入り給ひそ』と言へ」(傍線部(2))について、誰だれが誰にどういうことを言っているのか、具体的に説明せよ。

(10点)

問三 「名残なき御心かな」(傍線部(5))について、ここに表れた姫君の父母の心情を、状況を踏まえて説明せよ。

(10点)

問四 「陰陽師呼び騒ぐ」(傍線部(6))について、人々はなぜこのようなことをしたのか、理由を説明せよ。

(10点)

問五 「をかしけれ」(傍線部(7))について、どういうことが「をかし」なのか、説明せよ。

(11点)

二

解答

問一

(1) ちょっと行ってみよう

(3) 化粧は完成したと思って

(4) 姫君の顔が不気味なので

問二

姫君が侍女に、身づくろいができるまで部屋に入ってきて来ないでほしいと男に伝えてくれと言っている。

問三

娘に逢いに来た男がすぐに帰ってしまったと聞いて、男の態度があつさりしすぎていて冷たいとあきれれる心情。

問四

姫君の顔が気味悪くなってしまったのは、男の前の妻が、男が姫君を嫌いになるようにという呪いをかけているからだと考えたから。

問五

姫君の顔がだめになってしまったと騒いだが、実は姫君がおしろいと間違えて掃墨を顔に塗っただけだったということ。

速解！本問のツボ

① 文章の内容を正しく理解できていたかをチェックしよう

【文章の概要】

〈要約〉

男は新しい妻のもとを訪れる。突然の来訪に慌てた妻は、おしろいと間違えて掃墨はいすみを顔に塗りつけ、化粧は完成したものとすまして座っていた。男は驚きあきれてすぐに去っていく。娘の黒い顔を見て父母は倒れ、前妻の呪いかと大騒ぎになる。涙で掃墨が落ちるのを見た乳母が紙で顔を拭つてやると、もとの肌になった。

〈展開〉

I 男の突然の来訪に慌てる新しい妻

○男は「ちょっと行ってみよう」と新しい妻のもとにやつて来る。



○くつろいでいたところへの突然の来訪に慌てふためく妻。

・化粧道具を探す。

・おしろいと間違えて掃墨を取り出し、鏡も見ないで顔に塗りつける。

・顔には、まだらに指の形の跡がつく。

・化粧は完成したと思って、とりすまして座っている。

II 驚いて去る男

○男は妻の顔を見ると驚きあきれ、「もうしばらくしてから参ろう」

と言って、気味が悪いので去っていく。

Ⅲ 妻の家中の騒ぎと問題の解決

○父母は男がすぐに帰ってしまったと聞き、「冷たい御心だよ」とあきれられる。

○父母は娘の黒い顔を見ると、恐ろしくなって倒れてしまう。

「その御顔はどうなされたのか」と言い終わることもできない。

○娘は鏡を見るや否や、自分も怯えて「どうなってしまったの」と泣く。

○家の中の人も大騒ぎ。

「こちらの姫君を殿が疎みなさるようにと、前妻が呪っているそう。それでこんな御顔になってしまったのだ」と、陰陽師を呼んで騒ぐ。

○涙が落ちかかったところが通常の肌になる。それを見た乳母が、紙で顔を拭つてやるともとの肌になった。

Ⅳ 筆者の感想

○このような事情だったのに、「姫君の御顔がだめになってしまった」と騒いだことはおかしいことだ。

② 重要な設問のポイントをチェックしよう

問四 直前の家の人の言葉に着目。「これ」「かしこ」は注を参照しよう。「おはしたれば」の主体は殿(男)。「陰陽師」もヒント

にこの部分の言葉から、顔が黒くなった理由をどう考えているかを押さえよう。

問五 「をかし」は〈趣がある・風情がある〉という意味でよく出てくるが、ここでは〈こっけいだ・笑いたくなる〉という意味。本文全体のこっけいさを端的にまとめよう。

今覚える！重要古文単語

□ **むくつけし** ①気味が悪い・恐ろしい。②むさくるしい・無風流だ。

□ **あやし** ①不思議だ。②異常だ。③不都合だ。④身分が低い・卑しい。⑤みすばらしい・粗末だ。

↓もとは、自己の理解を超えたものへの驚きを表す。貴族から見ると庶民の生活は理解に苦しむもので、④⑤の意味が生まれたと考えられている。

出典

『堤中納言物語』「はいずみ」

『堤中納言物語』は平安時代末期以降に成立した短編物語集。

十編から成る。作者・成立年不詳。「はいずみ」は、おしろいと間違えて掃墨を顔に塗った姫君をめぐる話。

解説

問一 (1)「あからさまに」は形容動詞「あからさまなり」の連用形で、「ほんのちよつと」という意味である。「あからさまに」は「行く・出づ・入る」など移動を表す動詞にかかることが多い。ここは、男が新しい妻のもとを訪れる場面で、ほんのちよつと顔を出してみよう、という軽い気持ちで女のところにかけたことを表している。本格的な訪問に際しては「これから行きます」という意味の手紙を前もって送るのが礼儀であるが、ここは男が軽く顔を見せに行くという程度の気持ちで、事前に何も知らせていなかったため、突然男に來られた女側が慌てふためいているのである。

(3)「したてたり」は「したて／たり」と品詞分解され、「したて」は夕行下二段活用動詞「仕立つ」の連用形。「仕上げる」という意味。「たり」は完了の助動詞。「したてたり」で「仕上げた」と訳す。女は、男が來たというので、櫛の箱を探して、おしろいを顔に塗ろうとしたのだが、実はそれは掃墨だったのだ。慌ていて鏡も見えない女は、気づかずに塗ってしまう。しかし女は化粧が完成したつもりになっているのである。

(4)「むくつけけれ／ば」と品詞分解され、「むくつけけれ」は「気が悪い」という意味の形容詞「むくつけし」の已然形。已然形に接続助詞「ば」がついて、順接の確定条件を表す。ここは原因・理由の意。掃墨を塗って黒くなってしまった姫君の顔が不気味だったのである。

問二 発言者は女(＝姫君)。「そこにて、しばし」は、「そこにしば

らくいてください」ということ。「な入り給ひそ」に尊敬の補助動詞「給ふ」があることに注意する。「入る」主体は男。「なそ」は禁止表現。姫君は男に、まだ身づくろいができていないので部屋に入つてこないでください、と伝えたいので、このことを男に取り次ぐようにと侍女に言っているのである。

問三 「名残」はここでは「未練・心残り」というくらいの意味。「名残なし」で「心残りが無い」の意。「かく來たりと聞きて來たる」とあるが、娘のもとに夫となつた男が訪問してきたということの聞いて、両親が様子を見に來たのである。傍線部直前に「いとあさましく」とあるのに注意する。「あさまし」は「意外なことに驚きあきれる」意。両親は、男が「はや、出で給ひぬ(＝もうすぐで)出て行かれました」というのを聞いて、来てすぐに帰るとは、娘に対する愛情が少ない、と思つたのである。

問四 「陰陽師」とは、占いをつかさどる役人のこと。直前の人々の言葉に注目する。「これをば思ひ疎み給ひぬべきことをのみ、かしこにはし侍るなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる」とある。「思ひ疎み給ひ」と「おはしたれば」の主体は敬語から判断して「殿(＝男)」。注にあるように、「これ」は姫君(＝男の新しい妻)で、「かしこ」は男の前の妻である。「ぬべき」の「ぬ」は強意。「侍る」はラ変動詞「侍り」の連体形で、「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形である。「こちらの姫君を殿がきつと嫌いになるようにと専ら前の妻がしているそうだが、殿がこち

らにいらしたので、(あちらの呪いが効いて) 姫君の御顔が不気味に変わってしまった」と人々は考え、陰陽師を呼んで事態の解決を図ろうとしたのである。

問五

「をかし」は(趣がある)という意味もあるが、ここでは内容から判断して(こっけいだ)という意味に取る。「かかりけるものを」は(このような事情であったのに)ということ。「いたづらになる」は(むなしくなる・むだになる)という意だが、ここでは姫君の顔が見る影もなく激変してしまったことをいう。姫君の顔の、涙が落ちかかったところが通常の肌になった、というのは、掃墨が涙で流されて落ちたからで、姫君の顔が黒くなってしまう原因に気がついた乳母が、紙で姫君の顔全体を拭うと、果たして、墨で黒くなっていた顔が元に戻ったのである。つまり、おしろいと間違えて掃墨を塗ってしまっただけに、姫君の顔がひどい有様になってしまったのは呪いのせいなどと、大騒ぎをしたことが「をかし」なのである。これらの事情に触れてまめる。

全訳

この男は、「ちよつと(行つてみよう)」と言って、新しい妻のもとに、昼間に入つて来たのを見て、女は、(侍女が)突然殿がいらつしやいましたよ」と言うので、くつろいでいたところなので、慌てふためいて、「どう、(化粧道具は)どこに」と言つて、櫛の箱を取り寄せて、おしろいをつけるところ、取り間違えて、掃墨が入った畳紙を取り出して、鏡も見ずに、飾り立てて、女は、

「『そこに、しばらく(いて下さい)。お入りなさらないで下さい』と(殿に)言つておくれ」と(侍女に)言つて、夢中になつて(身づくろいして)いる。男は、「ずいぶん早く疎みなさることですね」と言つて、簾をかきあげて(女の室内に)入つたところ、(女は)畳紙を隠して、(手にしたものを)適当に塗り伸ばして、口を隠して、化粧は完成したと思つて(いるが、顔には)、まだらに指の形跡をつけて、目をきよろきよろさせて、まばたきをして(とりすまして)座つていた。

男は、見ると、驚きあきれて、例のないことだと思つて、どうしようかと恐ろしいので、近くにも寄らずに、「まあよい、もうしばらくしてから参りましょう」と言つて、少し見るのも気が悪いので、去つていく。

女の父母は、(男が)このようにやつて来たと聞いて来てみたところ、「もう、お帰りにになりました」と言うので、たいそうあきれて、「あつさりとしすぎていて冷たい御心だよ」と言つて、姫君の顔を見ると、とても気味悪くなつた。怯えて、父母も倒れ臥してしまつた。「その御顔は、どうなさつたのか」と最後まで言い終わることもできない。(娘は)「変ね、どうしてそんなことを言うの」と言つて、鏡を見るや否や、このよう(な真つ黒な顔)であつたので、自分も怯えて、鏡を投げ捨てて、「どうなつてしまつたの、どうなつてしまつたの」と言つて泣くので、家の中の人も、大騒ぎして、「こちら(の姫君)を(殿が)きつと疎みなさるようになつて(呪詛ばかり、あちら(の前妻のところ)ではしているようですが、(殿がこちらに)いらしたので、(あちらの呪いが効いて姫君の)御顔がこのようになってしまつたのだらう」と言つて、陰陽師を呼んで騒いでいると、(姫君の顔の)涙が落ちかかった

ところが、通常の肌になったのを見て、乳母が、紙を押し揉んで（姫君の顔を）拭うと、通常の肌になった。

このような事情であったのに、「（姫君の御顔が）だめになっておしまいになった」と言つて、騒いだことこそ、返す返すもおかしいことだ。